

俗語から口語へ—“colloquial”の訳語の変遷

加藤 信明

Transition from *zokugo* to *kōgo* in Modern Japan

Nobuaki Kato

キーワード：俗語，口語，colloquial，洋学資料，チェンバレン，B.H.

英文要旨：

The term “zokugo” means slang in present Japanese. In the Meiji period, however, “zokugo” simply meant colloquialism and not slang. In this paper, the historical transition of the term “colloquial” in modern Japan is observed.

日本語要旨：

英語の “colloquial” という語は現在では「口語」と訳されるが，明治期では「俗語」または「俗話」と訳されるのが普通であった。“colloquial” がいつから「口語」と訳されるようになったのか，その過程を洋学資料と英和辞典から探してみる。

はじめに

明治期には「俗語」という文字を冠した書物が多い。現在では俗語とは，いわゆるスラングを指すが，明治期においてはそうではなかった。よって，当時のたとえば「俗語文典」などをスラングを扱った書と考えると大変な誤解をすることになる。本稿では，“colloquial”の訳語が「俗語」から「口語」へと変遷していく過程を概観する。

1 “colloquial” とは何か

そもそも英語において “colloquial” という語が何を意味するかをまず見ておく。オックスフォード英語辞典（以下 OED と略す）はその前書きにおいて言語の位相を図1のように示している。

中央に COMMON（共通語）を置き上側が LITERARY（文語），下側が COLLOQUIAL（口語）と分かれており，COLLOQUIAL よりさらに下に TECHNICAL

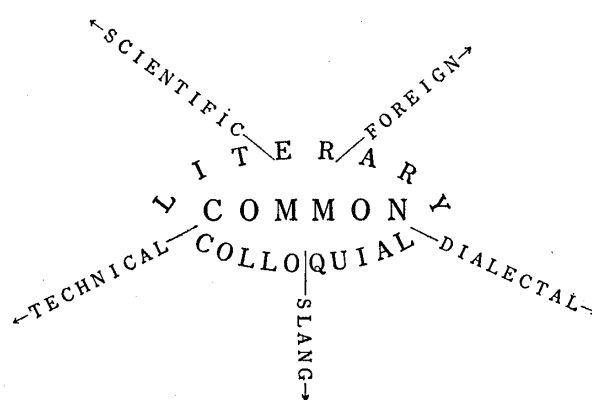


図1

（職人言葉），SLANG（スラング），DIALECTAL（方言）が位置している。ここでは “colloquial” が “literary” の対義となる概念であることが分かる。また，文字の大きさから COLLOQUIAL は TECHNICAL, SLANG, DIALECT とはレベルの異なる分類であることが伺われる。

同じOEDによる “colloquial” の語釈は次のように記されている。

Of words, phrases, etc. : Belonging to common speech; characteristic of or proper to ordinary conversation, as distinguished from formal or elevated language.

（試訳： 語や句などについて，一般の話し言葉に属す；通常の会話に特徴またはふさわしいとされ，形式ばったり高尚であったりするものとは異なる。）

OEDのこの定義によれば，“colloquial”は，一般的（common）ではあるが，程度が低いとか，俗語的であるというような意味は含まれていない。

次にアメリカの辞書としてランダムハウスから引用する。

adj. 1 characteristic of or appropriate to ordinary or familiar conversation rather than formal

speech or writing. 2 conversational (中略) COLLOQUIAL is often mistakenly used with a connotation of disapproval, as if it meant "vulgar" or "bad" or "incorrect" usage whereas it is merely a familiar style used in speaking rather than in writing.

(試訳: 〈形容詞〉1 形式的な話し言葉や書き言葉にではなく一般的なまたは親しい会話に特徴的またはふさわしい。2 会話の(中略) "colloquial" はしばしば誤って「下品」、「悪い」、「正しくない」という意味あいがあるがごとく、否定的な印象を持たれることがある。実際は "colloquial" は単に話し言葉の親しい文体であって書き言葉ではないということなのである。)

ここでも OED 同様, "colloquial" が悪い言葉ではないことを強調している。このように "colloquial" の原義は話し言葉における中立的なスタイルであって、現在使われている意味での「俗語」とは全く異なるものである。もっとも、「悪い言葉であるというような誤った印象を持たれることがある」とランダムハウスが述べている点も考慮しなければならないが、少なくとも言語学者が使うかぎりには, "colloquial" 本来の意味であると考えて良いであろう。

2 "colloquial" の訳語 (現代)

一般的な英和辞典として研究社の『新英和中辞典』第5版(昭和60年)の "colloquial" の項から引いてみる。

「口語(体)の、話し言葉の、日常会話の《★教育ある人が日常の談話で使う言葉についていい、無教育者の言葉とは別》」

訳語の第一に挙げられているのは「口語」でありしかもそれが「教育あるひとの談話」であって決して無教育者の雑な話し方ではないことがわざわざ注記されている。他の学習英和辞典の語釈も『新英和中辞典』とほぼ同様である。現代においては "colloquial" の訳語として「口語」が定着しているとみていいだろう。

3 洋学資料における "colloquial"

ここで洋学資料として扱うのは西洋人が日本ないし日本語について記した書物である。江戸末期から明治にかけて来日した西洋人で、日本語について優れた研究書を残したのは、主として J. C. ヘボン, S. R. ブラウンなどのアメリカ人と, E. M. サトウ, W. G. アストン, B. H. チェンバレンなどのイギリス人とである。研究の

分野は辞書、文法書、会話書と多彩だが、その各々から, "colloquial" に関連した叙述を見てみる。

まず書名そのものに "colloquial" をうたっている B. H. チェンバレンの "A Handbook of Colloquial Japanese" における代名詞の箇所を引用する。

The most usual equivalent for "I" is *watakushi*, lit. "selfishness." The vulgar often contract it to *watashi* and *washi*. Other nouns now current in the same sense are *boku*, "servant" (much affected by young men in speaking to each other); *sessha*, "the awkward person;" *shōsei*, "junior." *Ore* is a very vulgar corruption of *ware*, which is the commonest word for "I" in the written language. *Ora*, which may often be heard from the mouths of coolies, is for *ore wa*.

(試訳: I に対応する最も一般的な語は「わたくし」で selfishness を意味する。一般庶民はこれを縮めて「わたし」とか「わし」と言うことが多い。同じ感じで現在使われている語に「ぼく」(原義は servant で若者がお互いを呼ぶときによく使う)「拙者」(原義は the awkward person)「小生」(原義は junior), がある。「おれ」は、書き言葉では最もよく使われている「われ」の非常に下品な言い方である。人足の口からよく聞かれる「おら」は「おれは」のことである。)

"A Handbook of Colloquial Japanese" B. H. Chamberlain 1888

書名のとおりの書は日本語の口語を扱っており、ここでチェンバレンが最も一般的であると認めた一人称代名詞は「わたくし」であり, 「おれ」や「おら」は下品な言葉として、日本語を学習する西洋人に使わせないように配慮している。

このチェンバレンと同種の指摘は同年に出版された W. G. アストンの "A Grammar of the Japanese Spoken Language" にも見られる。今度は二人称代名詞の項から引いてみる。

Other words for 'you' are *konata*, *sonata*, *sono hō*, *sochi*, *nushi*, *ware*, *unu*, *sokka*. But *anata* and *omaye* will be found enough for most Europeans to trouble themselves with.

(試訳: You を意味する語として「こなた」「そなた」「そのほう」「そち」「ぬし」「われ」「うぬ」「そっか」がある。だが、ほとんどの欧州人にとっては、「あなた」と「おまえ」を知っていれば十分であろう。)

“A Grammar of the Japanese Spoken Language”
W.G. Aston 1888

アストンはまず「あなた」と「おまえ」とを外国人が使用すべき二人称代名詞とした後、上記に引用した8種の代名詞を紹介はするが、欧州人にとっては不必要であると述べている。「あなた」と「おまえ」の2種を挙げたのは、対等の相手と話す場合と、召使など目下のものと話す場合との2種類の場面を想定したためである。アストンはイギリスの外交官であったから対等の立場の日本人は、維新前では奉行や上級武士、維新後では高級官吏等であったと考えられる¹⁾。

アストンのこの書は、同氏の口語文典としては第4版であるが、扱う日本語の位相としては19年前の1869年に出版された初版から変わっていない。初版執筆の目的をアストンは次のように記している。

This book is intended for the use of merchants and others who wish to acquire a colloquial knowledge of the Japanese language.

(試訳： 本書は、日本語の“colloquial”な知識を得ようと思う、貿易商をはじめとする人々の使用に供するものである。)

“A Short Grammar of the Japanese Spoken Language” W.G. Aston 1869

この書は、書名に spoken とあるが、本文では spoken と colloquial が「話し言葉」の意味で同義に使われており、この態度は1888年の第4版になっても変わっていない。アストンは第4版まで改訂した口語文典のほかに文語文典をも著している。これは日本語の話し言葉と書き言葉との乖離が著しいためで、口語文典を実用文典、文語文典を理論文典と位置づけたのだった²⁾。

このように口語・文語2様の文法書を著したのはチェンバレンも同様であった。ただしチェンバレンの文語文典は古文対象ではなく、外国人が明治の文語を修得するための書であった点でアストンのものとは性格を異にする。その文語文典でチェンバレンは日本語における話し言葉と書き言葉との差について次のように述べている。

In Japan, as in other Eastern countries, two dialects are used simultaneously, one for speaking, the other for writing purposes. The spoken or colloquial dialect is that to which consuls, merchants, missionaries, and others who are brought into daily relations with the Japanese, must devote their first efforts.

(試訳： 日本では、他の東国の諸国と同様、2つの言語が並び行われている。ひとつは話すための、いまひとつは書くためのものである。“Spoken”あ

るいは“colloquial”言語は、領事、貿易商、宣教師、その他の人々が日本人と日常の交際をするために努力する必要のあるものである。)

“A Simplified Grammar of the Japanese Language” B.H. Chamberlain 1886

ここでもアストン同様、“colloquial”と“spoken”が同義に使用されている。

4 俗語とは何か(明治期)

前節までに、“colloquial”が現代の英和辞書においてもまた明治期の洋学資料においても、いわば「正格な話し言葉」を意味していたことを見てきた。では、明治期の日本人は、そのような「正格な話し言葉」を何と称していたのであろうか。明治期に国語学者によって著された口語文典の類をいくつか見てみよう。

松下大三郎博士は著書『日本俗語文典』において「俗語」「口語」の両者を同質のものとして述べている。

我が國語には文章に用ゐるものと談話に用ゐるものとあり。前者を文章語といひ、後者を口語又は俗語といふ。(中略)単に口語又は俗語といへば一様の如くなれど、各地各社会多少方言的の差無きこと能はず。然れども東京の中流に行はるるものは最広く通じ、他日我が標準語ともなるべきものなれば、之を以て我が口語を代表せしむること難からず。故に本書は主として東京の中流に行はるる語法を講ず。

『日本俗語文典』 松下大三郎(1901年)

松下は、日本語の方言差を認めた上で「東京の中流に行われる談話」に用いられる言語を俗語文典の対象とした。これは、外国人研究者が対象とした日本語の話し言葉の位相と一致する。つまり当時においては「俗語」といっても決してスラングや卑語をさすものではなかったのである。

同様の考えは同時期の他の俗語文典にも示されている。

我國でもむかしは、耳にきく言葉と、目で判断する言葉とが同じものでしたが、今は、口語と文語との二種に分れて居りますから(中略)この本の言葉は、主として東京の言葉を標準としました。

『日本俗語文典』 金井保三(1901年)

近来言文一致の論、一たび起りてより俗語に関する書の刊行せらるるもの甚だ多きに至れり(中略)此書若し世人をして我俗語の完美なることを自覚せしむるに於て多少卑益する所あらば余の最も幸福とする所なり。

『日本俗語文法論』 入江祝衛 (1902年)

金井は「東京の言葉を標準とした」と言い、入江は日本語の俗語が「完美」とであると述べている。いずれも、彼らが記述の対象とした「俗語」が正格な話し言葉である旨を表したものである。

これらの文法書において「俗語」「口語」が全く同義に使われているのは、洋学資料が spoken と colloquial とを同義に使用しているのと類似している。だが、いずれの文典も表題には「俗語」を掲げており、このほうが当時まだ人口に膾炙していたと考えられる。ただ時代が下るにつれて文法書の表題は「俗語」から「口語」へと移っていく。(表1参照)「口語」を冠した最初の文典が現れるのは明治36年(1903年)であり、「俗語」を冠した最後の文典が出されるのが明治39年(1906年)であるので、この間を俗語から口語への移行期間と見ることができる⁹⁾。

表1 近代口語文典の表題の変化
(服部隆氏作成のリストによる)

	明34	35	36	39	40	41	42	43	44	45	大2
俗語	2	2		1							
口語			1	3	1	2	2	1	1	2	3
その他	2								1		

(注) その他：明34 はなしことば
明44 言文一致

5 “colloquial” の訳語 (明治・大正期)

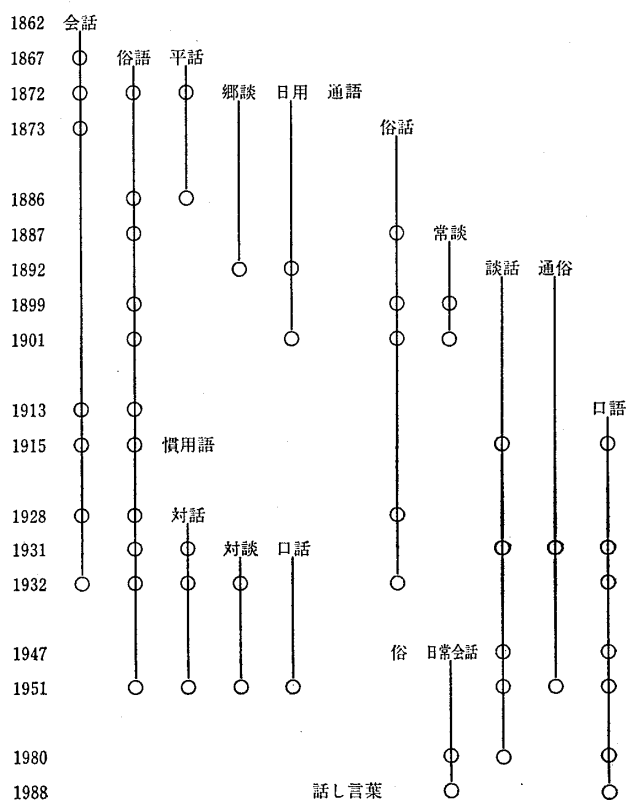
文法書において“colloquial”の概念を表す日本語が「俗語」から「口語」へと移行していった時期はだいたい確定できたので、次に英和辞書が“colloquial”の訳語として掲げている語を主要な辞書によって追ってみる。

- 1869 (明治2) 改正増補和訳英辞書 会話ニ就テノ
- 1873 (明治6) 附音挿図英和辞彙 俗話ノ、会話ノ
- 1875 (明治8) An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language (初版) heiwa, zokugo
- 1879 (明治12) An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language (2版) heiwa, zokugo
- 1887 (明治20) 挿画訂訳英和対訳新辞書 会話ニ就テノ
- 1888 (明治21) ウェブスター氏新刊大辞書と訳字彙 俗話ノ、会話ノ、俗語ノ
- 1899 (明治32) 再訂増補和訳英字彙 俗語ノ、俗話ノ

常談ノ

このように明治期における英和辞書の訳語としては「口語」はまだ現れない。“colloquial”の訳語として「口語」が載るには1913年(大正2年)まで待たなくてはならない。文典における「俗語」から「口語」への移行と比べると7、8年の遅れがあるが、辞書の性格として新語を載せるのはそれが完全に社会に定着してから、ということがあるのでこれはやむを得ない。肯定的に見れば、1913年には辞書の訳語として採用されるまでに「口語」は定着したと言える。図2に各種英和辞書における“colloquial”の訳語の変遷を挙げたので参照願いたい。

図2 英和辞書における訳語の変遷



6 語訳の変遷

図2では、ある訳語が現れた年から、その訳語が使われた最後の辞書の年までをタテの線で結んである。線上の○印はその年に刊行された辞書にその訳語が載っていることを示す。したがって線の長い語ほど長く使われたものであり、また○印の多いものほど多くの辞書に採用されたことを意味する。

1862年と、最も早く現れた訳語の「会話」は下限が1932年であるので、寿命は71年であった。1867年から1951年まで使われた「俗語」は85年とこれらの訳語の中では

寿命が最長である。現在広く使われている「口語」が初めて辞書に採用されたのは、前にも述べたように1913年と比較的新しく、1988年まででも76年しか経っていないが、今後も使用され続けることはまず間違いないので、いずれ「俗語」の記録を更新することになるだろう。

その他の訳語で目立つものに「俗話」「談話」がある。「俗話」が現れる辞書においては『附音挿図英和辞彙』（1873）を除いて「俗語」と併記されて使われるのが特徴である。「談話」は1980年まで健在だが、以降は conversation の訳語として使われ、colloquial の訳語としては姿を消す。

7 和英辞書における俗語等

第5節と第6節では英和辞書における“colloquial”の訳語の変遷を見てきたが、本節では逆に和英辞書が「俗語」をどのように英訳しているかを見る。現代の和英辞典で「俗語」を引けばまず間違いなく“slang”が訳語として記されているが、「俗語＝スラング」ではなかった明治期においては当然異なる訳語及び語釈がなされていた。初めの和英辞書である J. C. ヘボン著『和英語林集成』は、初版（1867）と2版（1872）の記述は同一で、「俗語」の見出しはなく、「俗言」の項に同義語として載せられているに過ぎない。

Zoku-gen ゾクゲン、俗言、or Zoku-go、ゾクゴ、n.

The common, or vulgar dialect, such as is spoken by the common people; not the learned, elegant or refined language of scholars.

（試訳： 名詞。民衆が話すような通俗で下品な言葉；学問があり優雅で洗練された学者の言葉ではない。）

『和英語林集成』初版（1867）、同2版（1972） J. C. Hepburn

この語釈では「俗言」「俗語」ともに下品な言葉として扱われているが、2版出版から14年を経た明治19年に大幅に増補された3版では、「俗言」と「俗語」は別見出しとなり、語釈も変わる。

Zokugen ゾクゲン 俗言 n. The common, or vulgar dialect; the common colloquial or spoken language.

Zokugo ゾクゴ 俗語 n. The common colloquial or spoken language.

『和英語林集成』3版（1886）

「俗言」には、初版、2版にある「通俗で下品な言葉」という語釈に「一般的な話し言葉」（common collo-

quial or spoken language）が追加された。また、独立見出しとなった「俗語」は、単に「一般的な話し言葉」とされた。この変化を見ると明治初期までは同義であった「俗語」と「俗言」とが意味分化していき、前者が“colloquial”や“spoken”に対応するレベルの話し言葉を、後者が話し言葉の卑俗な部分を分担することになったのが、明治10年代の後半のようである。

こうしてみると、「俗語」は英和辞書において colloquial の訳語として記載されている期間こそ長い、安定した主たる訳語でありえたのは『和英語林集成』3版に採用された明治10年代後半から、「口語」が登場する大正初めの頃まで、と言えそうである。

おわりに

「口語」という言葉がいつ頃どのように確立されていたかについては、すでに古田東朔氏の綿密な論考があるので（参考文献「『口語』ということば」）小稿はそれと重ならない範囲で“colloquial”の訳語としての「俗語」と「口語」を扱った。洋学資料名を邦訳する際に、spoken と colloquial とを訳し分けようとする、前者に「口語」を後者に「俗語」を充てることがあるが、colloquial が「俗語」とイコールであったのは明治の一時期だけであるので、誤解を避けるためには、一律に「口語」とすべきであろう。

追記

小稿は1988年5月20日、近代語研究会第59回例会にて口頭発表した内容をまとめたものである。また、調査に使用した英和辞書は、国立国語研究所言語変化研究部所蔵のものである。閲覧の便宜を与えてくださった国立国語研究所飛田良文部長に御礼申し上げます。

注：

- 1) 「イギリスの威信をかけた外交官である E. M. サトウは、『領事官は奉行と対等』の地位にあり、また、宣教師 S. R. ブラウンも、J. C. ヘボンとともに文久二年に幕府が横浜在住の官吏の子弟のため運用所前の官舎に設けた横浜英学所の教師となっており、上士の儒者や医師と同格にみなされたであろう。したがって、S. R. ブラウンも、E. M. サトウも『卑しい下僕』とみなされた農工商の階級の日本語を習得しようとしたとは考えられない。」飛田良文「英米人の習得した江戸語の性格」『国語学』108集 1977

- 2) 加藤信明「アストン『日本口語文典』四版の性格」
上智大学『国文学論集』19号 1986
- 3) 国立国語研究所非常勤研究員服部隆氏作成の明治期
文法書一覧（未公刊）にもとづく。

参 考 文 献

口語文法の成立 古田東朔『口語文法講座 1 口語文法

の展望』明治書院
 会話篇 (E. Satow) にあらわれた江戸ことば 小島俊夫
 「国語国文」昭47.5
 英米人の習得した江戸語の性格 飛田良文「国語学」
 108集 昭52
 「口語」ということば 古田東朔「香椎潟」27 昭57
 国学者の雅俗意識 高橋永行 都立大方言学会 193 回発
 表資料 昭61